

駅通情報

第4号

時 評

○ 後述のとおり、今回、読売新聞から賞を受けた。

「北のくらし大賞・奨励賞」というのである。

自分のことは知っているようで、意外、知らないもので、私は今回の受賞をつうじて、独りよがりな点、他人の評価等を知るうえに、よい機会であったと思っている。

○ NHKのテーマ番組の「トータク精彩集」というのがある。

その中で精彩集は、「おみやげをたくさん買ってくる旅ではなく、みやげ話しをたくさん仕入れてくる旅にしたい」といっていた。

私は、近年、アメリカから帰ってきたばかりで、おみやげを買うことと、遊ぶことに悩んだ経験をしたばかりであったので、わが意を得たものと心に残った。

○ 心のボタンを一つはずせー

俺が、おれが、と片ひしを張って自己主張するのをやめて、一息、深く深呼吸してはどうか。すると、遠くのものが見えてくるはずである。

これは、他人に言うことではなく、自分に言い聞かせる言葉であるのかも知れない。

目 次

一	時 評	1
二	晩秋の旧中山道を歩く	1
三	読売新聞「北のくらし大賞・奨励賞」を受賞	3
四	事務同たより	4

晩秋の旧中山道を歩く

— 安曇野・木曾路の往時の風情を偲ぶ —

旧街道といっても現代に至ると、路面は拡張舗装され民家も近代風に改装されていて、全国的にも、江戸時代の風情を今に残している地域は少ない。その中において、いささかでも昔の面影を残しているとするれば、研究の比較的進んでいない中山道、それも極く短区間の地域である。

今回、晩秋の旧中山道の一部を歩行する機会を得た。

今回の旅の主目的は、私の、旧来からの研究課題である、「北海道新駅（駅通）制の研究」に関連して、本州に往時から

残されている史跡を訪ねて史料を収集し発表することである。今回、旅行対象区間は二地方で、その一つは、長年に亘って地域住民によって育まれ保存されてきた安曇野地方に散在する道祖神を訪ねること。もう一つは、中山道六九宿（東海道と競合する二宿を除くと六七宿）のうち、本曾路一一宿を歩くことであつた。

一、安曇野周辺に散在する道祖神

前日は、名古屋空港に下り立ち、松本經由安曇野山中にあるホテルに一泊。早朝、安曇野・穂高両町に広がる道祖神を地図を頼りにテクトクと走り歩くのである。私は、道祖神はとも同周辺に広がる江戸時代そのままの自然環境と石像のたたずまいが気に入つた。

安曇野は、本街道から大分入り込んだところで、時代の変化を余り受けない静寂そのものの地域である。路傍には至るところ道祖神が祀られ、昔の街道筋もかくやと健ばれる。民家には、家ごと菊が咲き乱れ、たまには、私の好きな紫式部が実をつけていて、それがキラキラと輝いて秋の深まりを感じさせる。五・六キロ圏内に散在する道祖神を巡るのであるが、不審に思つたのはその掘られた石像がすべて、青と赤の塗料が塗られていることである。近くにいたおばあさんに聞くと、毎年、「道祖神祭り」があつて、そのさい塗ることになっているとのことである。私には、素掘りのままの方が情緒があるように思われたがどうであらう。

前にも書いたように私達は、この地域を地図を頼りに道祖神を巡り歩くのであるが、これは「寒の神・行路者の守護・五穀豊穡・子孫繁栄」等、それぞれの目的によって祀られている。私達は、その道祖神及びその周辺の佇まいによって、江戸時代の集落の構成・住民の思潮・行旅者に対する住民の考え方を窺い知るのである。

二、本曾路一一宿

私の、今回の旅の最も大きな楽しみは、本曾路を足で歩き、宿場を形成していたであろう各種の宿駅機関と、旧街道の風情をこの身で実感することであつた。中山道の中でも本曾路は、昔の環境を色濃く残し、保存状態もよいと聞いていたので期待して出かけた。

1. 奈良井・本曾路一宿は晩秋の佇まい

藤村は、「夜明け前」で、本曾路は、すべて山の中といつていふように、確かに、本曾路一一宿は一部を除いて人家も少なく、旧街道筋はうっ蒼たる樹林の中である。塩尻から本曾路への入口に「是より南本曾路」とある。

最初訪ねた奈良井宿は、本曾路二番目に所在する宿場町で、町並の保存状態もよく昔の面影を残している。私の知りたい間屋も、上・下二軒ある。宿を構成する宿村と助郷村を合わせて四〇九軒（兎玉幸多著・宿駅）、本曾路沿いの他の宿場の二・三倍の戸数がある本曾路最大の宿場である。従つて、間屋を支える人馬並立で負担は、住民が多いだけに他の本曾路沿いの

宿駅に比較すると軽かったと見られる。

ここで、若干道がそれるが、人馬の軌立ての一切を掌る四屋の業務に比べると、宿に課せられた最大の任務は、人馬の負担とこれが提供である。前述の児玉幸多著「宿駅」によると、正保三（一六四六）年、幕府道中奉行から中山道各宿に達しられた人馬の提供は「五〇人五〇疋」。そのうち木曾路は、その半分の「二五人二五疋」であるとしている。木曾路の人馬の供出が少ないのは宿間距離も遠く、沿道人口も少ないからであろう。宿の人馬に不足を生じた場合、不足分を負担応援する助郷は、豊川・奈良井・藏原・宮ノ越の四宿と福島・上松・須原の三宿、それに野尻・三留野・妻籠・馬籠の四宿は、それぞれ助郷村を共通していた。これらの宿は山間地で、付近の村々に助郷を求め難い地域状況にあつたからであろう。

因みに、北海道における文化四（一八〇七）年の松前街道沿い木古内宿に課せられた人馬の負担は、一〇人一〇疋であつたから（拙著「上巻参照」）、中山道が、京坂と江戸を結ぶ大幹線街道としては人馬負担はむしろ軽いと認められる。これでも人口の少ない木曾路としては沿道住民の生活を圧迫する度合いは大あかつたのかも知れない。

さて、現実に戻って、現在の奈良井宿は、問屋・史料館・本陣跡のほかには、当時を知る史跡は残されておらず、資料も期待したほどのものは見当たらない。

この宿場は、前述のように街道切つての大きな宿場であつたが、住民の生活を支えていたものは、木彫と漆塗りであつた。現代も同様で、軒並み塗屋が連なつていて、この点、昔と違わ

ない生活形跡と見られた。

奈良井宿から、さらに三ツ目に福島宿がある。ここには、中山道の中間宿として関所が設けられていたが、明治二（一八六九）年廃止された。宿駅の廃止は明治四年七月であるから、それより僅かに二年前のことである。現在は、地元の配慮によつてほとんど現状に復元されている。地形からみても、右は木曾川、左は山岳が迫つていて関所としては格好の場所であると思ふ。この関所は、全国五〇か所の関所のうちでも、東海道の箱根・荒井・中山道の碓氷と共に、天険の地の重要関所として、天下にその名を馳せていた。

史料は豊富に保存されていて、特に「女改め」に關する史料が多数目につく。

関所のほか、高札場・本陣跡・代官屋敷等が保存されているが、私にとつて、これまで図書で得た知識以上のものは得られなかつた。（未完・以下次号に続く）。

読売新聞「北のくらし大賞・奨励賞」を受賞

一受賞対象「駅通史の研究・刊行」一

今回、読売新聞から標記の賞をもらった。

私は、これまで、北海道宿駅（駅通）制度に關して、読売新聞に投稿も記事提供も行ったことがなかつたので、他社への私の記事が関係者の目に止つたのであろう。同社が今回の募集対象を広く他社にまで求めたことに対し、さすが、中央紙の度量

の大きいのに感心した。

本来私の研究対象である駅通制度は、「北のくらし」に大きく関わってきたものであることは史実に明らかである。ただ、現代の道民には通か遠い存在として忘れ去られた制度であることは否めない事実である。今後、従前以上に制度への実態の解明と、一般への周知を図って行くことが、私に与えられた責務であると痛感した次第である。

今回の、私以外の受賞対象作品は、イベントあるいは集団で特殊な作品を作るといったものが大部分であって、私のように個人で、しかも、図書館行といったものが取り上げられたことは、大賞ができて以来初めてのことであるようである。

私は、表彰式のさい、求められるままに次のあいさつをした。

記

今回、私の受賞対象になった駅通制度は、かつて私共の先祖が、新天地を北海道に求めて「北のくらし」を始めて以来、大きな関わりがあったのであるが、残念ながら、これまで道民一般には余り認識されてこなかったのである。

それだけに、今回の受賞は、私個人に対することより、駅通制度にとって喜ばしく思う。今回、道民に駅通制度を再認識してもらう機会を与えてくれた読売新聞並びに選考に当たられた関係者に感謝を申し上げて、お礼としたい。

◎ 事務局 だより

一、駅通所開設等について、次の調査依頼を受ける。

釧路支庁管内計開駅通の開設時期と歴代駅通取扱い人の確認
 徳本町 藤本 亨氏

二、これまでの各号で、「特殊な形態の駅通を探る」との標題で連載してきたが、本号でも、同様趣旨で「駅通所管理人の配置と出張所の設置」について掲載予定のところ、スペースがなく次号に回すことにしたので了承されたい。

発行年月日 平成九年二月十日

領 布 無 料

発 行 者 ○〇五 札幌市南区川沿四條五丁目

三ノ一

史学研究会 宇 川 隆 雄